

Title	ハーバート・スペンサーの世界
Sub Title	Herbert Spencer's world : the scope of sociology
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1974
Jtitle	哲學 No.62 (1974. 3) ,p.185- 220
JaLC DOI	
Abstract	<p>What is the subject-matter of Sociology? What is the relation between Sociology and other sciences? How is it possible to study social phenomena scientifically? What is a society? Are there any social types and constitutions? These questions are questions of transcendent importance for Herbert Spencer (1820-1903). He was a philosopher, but he was also a founder of Sociology as a new science. Viewing social phenomena as super-organic phenomena, Spencer discussed the natural history of society and then asserted the necessity of Descriptive Sociology and Comparative Sociology. Using Spencer's phrase, the only History that is of practical value is what may be called Descriptive Sociology and the highest office which the historian can discharge, is that of so narrating the lives of nations, as to furnish materials for a Comparative Sociology and for the subsequent determination of the ultimate laws to which social phenomena conform. What is a Social Science? Briefly speaking a Social Science, that is Sociology, is a science of social evolution which try to recognize truths of social development, structure, and function, that are some of them universal, some of them general, some of them special. This science has for its subject-matter the growth, development, structure, and functions of the social aggregate, as brought about by the mutual actions of individuals, but he as well referred to the accumulation of super-organic products. It was necessary to collect, classify and arrange various social facts according to sociological framework planned by Spencer. These social facts based on his sociological framework were really sociological facts. The core conception of sociological theory of Spencer is that of social division of labor. This social division of labor is nothing but sociological division of labor. Spencer noted economical division of labor and physiological division of labor in Biology. The former was one of the main problems in the field of Political Economy, of which one of other problems is the notion of static and dynamic approach of social phenomena. It is notable that sociological theory of Spencer has its origin in Political Economy and Moral Philosophy in Britain and that each of his sociological approach or sociological point of view is intimately connected with his theories of Psychology, Biology, and Ethics. According to Spencer the human being is at once the terminal problem of Biology and the initial factor of Sociology. Herbert Spencer's Sociology is framed by, or based on these various sciences, however his Sociology has its original subject-matter and its specific scope. Today many sociologists use technical terms coined by Spencer himself and some of these terms are as follows : structure, function development, status, organization, institution, and social phenomena, etc. Surely his sociological theory may be called proto-Sociology, but it is also evident that there are many fundamental problems and methods of Sociology in his works from Social Statics (1850) to Principles of Sociology (3 vols., 1876-96). Also his sociological point of view may be traced in The Study of Sociology (1873) and the first volume of Descriptive Sociology (1873). One of crucial problems proposed by Spencer is as follows and this question still now remains problem of great importance; What is the relation in a society between structure and growth? Up to what point is structure necessary to growth? after what point does it retard growth? at what point does it arrest growth?</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000062-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハーバート・スペンサーの世界

山 岸 健

人びとを研究しようと思うときには、自分の近くを見なければならない。しかし人間を研究するには、視野を遠くまでのぼすことを学ばなければならない。特性を見いだすためには、まず差異を観察しなければならないのである。

J.-J. ルソー⁽¹⁾

ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820~1903) の「社会学の研究」(The Study of Sociology, 1873) が出版されたのは今から百年前の1873年のことである。この1873年には、研究協力者の参加を得て、その仕事が進められた、スペンサーの「記述社会学」の第1巻も刊行されたのである。これらの著作の出版から数えて百年の歳月を経た今日、スペンサーの業績について検討を試みることは、社会学の研究者にとって、必要な課題と言えよう。コント、スペンサー以降の社会学の研究の展開過程を考察するならば、社会学の研究者が、いずれも、多かれ少なかれ、こうした初期の社会学説に学んでいること、そして、ある場合には、研究者が、どれほど多くの事柄を彼等の著作から学んでいるかと言うことは、明白な事実である。

コント (Auguste Comte, 1798~1857) は、「実証哲学講義」(Cours de philosophie positive, 6 vols., 1830~42) の第4巻において、社会哲学に関する考察を試みたが、そうした考察は、それまでに彼自らが用いていた、社会物理学なる名において為されたものであった。コントは、この第4巻の一節において、従来の社会物理学に対し、「社会学」と言う新しい名称を考案しているが、われわれは、ここに、社会学の登場の場面を見ることが出来る。この新しい科学である社会学にあっては、社会現象におい

て独自の根本的な法則の全体に関する実証的研究が、課題となったのである⁽²⁾。かくして、コントにおいては、社会の自然的秩序について考察を試みる社会静学と、社会の自然的進歩について論ずる社会動学の両部門が設けられたが、彼の社会学説は、全体として見るならば、社会動学を主要な論点とする学説とみなされるであろう。コントにとっては、進歩は、秩序の目的であり、秩序は、進歩の条件であった。要するに、社会の秩序ある進歩こそ、コントの思索の中心的要点と言えよう。コントは、著名な1822年の論文、「社会再組織のために必要な科学的作業案」において、社会物理学の概要について論じ、三段階の法則に関しても説いたのである。コントは、この論文の中で、一定の限界を認めつつも、モンテスキューとコンドルセの著作の有する意義を認め、彼等の考察を社会の実証的研究の先駆的業績と評価したのである。スペンサーにとって、コントの場合のモンテスキューとコンドルセに相当する人物がいるとすれば、それは、スミスとファーガソンにほかならない。コントが、フランスの思想的系譜に位置づけられるように、スペンサーは、まさしく、イギリスの思想的系譜において、そのところを占めている。スペンサーは、イギリスの哲学史にあっては、19世紀を代表する哲学者として登場する。しかしながら、彼は、19世紀のヨーロッパの哲学史においても、独自の哲学体系を確立した哲学者として知られるのみならず、さらに、コント、ミル、トクヴィル、マルクス等とならんで、スペンサーは、社会学の初期の代表的研究者の一人として、われわれの前に現われる。スペンサーは、これらの研究者のなかでも、社会学の体系的樹立に寄与した点では、筆頭と目される思想家である。その学説・思想に対して、どのような批判が加えられようとも、スペンサーのこうした位置づけについては、おそらく、なんらの異論も見られないであろう。スペンサーは、コントとともに、社会学の研究者によって、最もしばしば、言及された研究者であるが、また、スペンサーほど、厳しい批判を浴びた研究者も数少ないであろう。デュルケムは、コントおよびスペン

サーの学説を実証的形而上学と批判し、後に、パレートは、スペンサーの学説を形而上学と評した。さらに、ベルグソンは、スペンサーの進化論を、にせの進化論と批判している（「創造的進化」1907年）。ベルグソンの批判は、次のようなものであった。——「19世紀の思考がそのような種類の、恣意をはなれて特殊事実の細部におりてゆける哲学を要求していたということは、疑いない。そのような哲学は私のいう具体的な持続に腰を据えるべきだ、とそこでは感じられていたこともまた争えない。精神的な諸科学の成立したこと、心理学の発達したこと、生物の諸科学において胚生学がますます重要になったことなど、それらはいずれも内的に持続するものすなわち持続そのものとしての事象という観念を暗示したにちがいない。それだけにひとりの思想家が立ちあがって進化説をとなえて、そこでは物質が知覚性へすすむ動きと精神が合理性にむかう歩みをともどもに辿りなおすことができるとしたとき、外と内の対応が複雑化するさまを一段々々と追ってゆくことができるとしたとき、つまり変化こそものの実質そのものだとしたとき、万人の注視はそのひとに集まることにもなった。スペンサーの進化論が当代の思考をつよく惹きつけたわけであった。（中略）スペンサーの理説はなるほど進化論の名を冠していた。宇宙的生成の流れをのぼり下りするつもりだとそれは称していた。真相は、そこでは生成も進化も問題になっていなかった。

いま私はスペンサー哲学の立ちいった吟味に入りこまないでもよい。ただこれだけをいうなら、スペンサーの方法がいつももちいる技巧は、進化しとげたものをくだいた細片でもらて進化をもとどおり構成することである。（中略）スペンサーは事象をその現在の形態のままに受けとる。それをくだき、断片にして風にのせて撒きちらす。そうしてからそれらの断片を「積分」し、かつそこから運動を消す。スペンサーはモザイク仕事で「全体」を真似しておきながら、全体のデッサンをありのままに追ってその発生を辿ったとおもっている」⁽³⁾ スペンサーの思想は、社会学の領域に

においては、デュルケム (Émile Durkheim, 1858~1917) を初め多くの社会学の研究者によって批判され、また、哲学の領域においては、デュルケムと同世代のベルグソン (Henri Bergson, 1859~1941) 等によって批判を受けたが、そうした批判を試みた研究者・思想家は、批判を試みつつも、スペンサーに学んでいる。特にデュルケムは、スペンサーの社会学説に多くを学び、コントの学説にも学びつつ、独自の社会学説を主張したのである。ジンメルも、デュルケムと同様にコント、スペンサーの学説を批判し、社会において社会なるものを研究する、固有の社会学説を明らかにした。かくして、デュルケムとジンメル (Georg Simmel, 1858~1918) の助けを借りて、19世紀末にいたり、社会学の研究においては、新たな局面の展開が見られたのである⁽⁴⁾。

スペンサーとコントの社会学説の詳細な比較検討は、重要な研究課題となるが、ここでは、この点については触れない。スペンサー自身は、自らがコント主義者、ないしは、コント流の実証主義者と見られることに反対しており、コントの見解に対しても批判を加えている。コントとスペンサーの両学説を比較すると、幾つかの共通点も認められるが、スペンサーの学説の形成と、学説の要点を単にコントの影響、あるいは、ダーウィンの影響と言う点においてのみ考察することは、危険であり、コントとスペンサー、スペンサーとダーウィンのそれぞれの関連性については、独自の検討が必要となる。スペンサーと同様に、コントも、ファーガソンの見解に注目しており、スペンサーとダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809~1882) は、いずれも、ライエル (Sir Charles Lyell, 1797~1875) の著作に接し、この著作に学ぶところがあった(「地質学原理」, 3巻, 1830年~33年)。ダーウィン自身も語っているように、ビーグル号の航海(1831年12月27日から1836年10月2日まで)は、ダーウィンの生涯で、ぬきんでて重要な事件であり、その全経歴を決定するものであった。この航海に際して、ダーウィンは、ライエルの「地質学原理」の第1巻をたずさえて旅を

し、この著作から多くの事柄を学んだのである。ダーウィンが、ビーグル号の航海を終了してイギリスに帰国した翌年の1837年、スペンサーは、ロンドン―バーミンガム鉄道において職を得て、やがて、鉄道技師となり、世に出たのである。スペンサーの「自伝」の第3部は、技師としての生活の開始を述べた、第9章をもって始まっているが、スペンサーの記述によれば、スペンサーは、1837年11月8日にロンドンに到着している。鉄道技師として世に出て、やがて、ジャーナリストとなり（「エコノミスト」の副編集者）、「社会静学」（1850年）の刊行によって、思想家として出発し、1850年代の後半において独自の哲学体系を構想するにいたったスペンサーは、イングランド中央部のダービーの、非国教徒であった下層中産階級の教師の家に生まれたのである。

イギリスの19世紀は、時には、鉄と石炭の時代、蒸気力の時代、鉄道の時代とも言われるが、こうした呼称は、特に、19世紀前半のイギリスにおける生活の著しい変化を端的に示している。スペンサーは、鉄道技師として、当時の科学技術の先端を行く鉄道の発展を眼のあたりに見ていた。彼のこうした生活は、スペンサーの生活史において、注目に価するものである。「自伝」の第10章は、ウースターにおける生活の章であり（1838年～40年、18才～20才）、この当時、スペンサーは、バーミンガム―グロスター鉄道に勤務しており、スペンサーの技師としての職場は、ウースターにあった。スペンサーの生活は、その後、多様な展開を示しているが、ここで、われわれは、「自伝」の次の1節には、注目しておかなければならない。彼は、1840年当時を回想して、次のように記している（「自伝」、第12章）。

バーミンガム―グロスター鉄道の一部は、諸々の化石に富む、青色石灰岩の粘土層を通過する。ウースターのオフィスには、いつも、アンモン貝類のサンプルと、アンモン貝が生み出した、第二次的な軟体動物の他の諸形態のサンプルが置かれていた。そして、私は、これらのサンプ

ルに興味をもって熟視した。(中略) 鉄道沿線を歩くことによって、私には便宜が与えられたので、私は、徐々に、地質学の研究——しかしながら、きわめて表面的な研究であったが——に導き入れられたのである。(中略) 諸々の化石のこうした収集は、少年時代の私の習慣の、新たなフォームをとった、再開始であった。収集を行なうと言うことは、まさしく、なんらかの自然史研究の独自の開始にほかならない。(中略) こうしたことの一つの結果は、その当時、新たに出版された著作である——ライエルの「地質学原理」の購入であった⁽⁵⁾。

スペンサーは、ライエルのこの著作の購入を通じて、重要な意義を有する事実に接することになった。彼は、この著作の購入前の数年間にわたって、人間と言う種は、ある一層低級の種から発達して来たものであると言う仮説を認識していた。ライエルの著作の章は、種の起原に関するラマルクの見解の論駁にあてられていたが、こうしたライエルの著作に接することによって、種の起原、ないしは、生物の進化について、スペンサーは、益々、関心を示すにいたり、かくして、後年にいたって見られた、彼の思想の核心に相当する部分の発酵が、次第に認められるのである。スペンサーにあっては、各種の化石は、自然史研究 (natural history study) の糸口となったものであり、これ以後、自然史に対する彼の関心は、失われることはなかった。スペンサーは、やがて、社会の自然史 (natural history of society) について論ずることになる。スペンサーの記述社会学は、こうした社会の自然史と密接な関連性を有するものであった。スペンサー自身にとっては、「自伝」は、いわば、「自己自身の自然史」 (a natural history of myself) に相当するものであった。スペンサーの社会学説は、社会の自然史の探究から出発して、社会現象の総体的把握を試みようとした。スペンサーの思索の所産であるが、こうした社会学説は、究極的には、彼の哲学体系のうちに位置づけられるものである。スペンサーの社会学説は、

一般的原理，ないし，理論としてとらえるならば，比較社会学の名称をもって把握され得る学説であるが，比較社会学は，記述社会学を根底としてこそ成立するものであり，記述社会学と比較社会学の密接な相互的関連性は，スペンサーの社会学説研究において，十分に考慮するべき一つの要点にほかならない。科学としての社会学の成立を期するために，スペンサーは，記述社会学の探究に対して並々ならぬ情熱を注いだように思われる。しかしながら，彼は，記述社会学の領域にのみ，とどまった訳ではない。スペンサーは，異なる種々なる人間社会を比較考察することによって，社会の発達・構造・機能に関する諸原理を究明しようとしたのである。スペンサーは，無機的・有機的・超有機的進化にわたって全体的考察を企てたが（「総合哲学体系」，全10巻，1862年～96年），こうした進化のうち，超有機的進化に関する研究は，「社会学原理」（3巻，1876年～96年）において試みられた。「記述社会学」は，この「社会学原理」の研究に必要な社会的諸事実の収集と整理，体系化を目的として用意されたものであり，スペンサーは，「社会学原理」の刊行以前に「記述社会学」の第1巻を世に送り（1873年），また，「社会学の研究」を著わしたのである（1873年）。「社会静学」の出版は，1850年のことであり，この最初の単行本の刊行後，スペンサーは，もはやジャーナリストとしてではなく，一人の思想家・哲学者として歩み始め，1850年代の終りには，すでに，社会学説の核となるべき原型をほぼ完成させていたのである。社会学説の形成過程と主要な論点を考える場合，われわれは，スペンサーの二論文に特に注目しなければならない。それらは，「進歩，その法則と原因」（1857年），および，「社会有機体」（1860年）と題された論文であり，いずれも，彼の社会学説の二つの支柱を明確に示した記念碑的意義を有する論文である。社会学説の形成，総合哲学体系の構想を考えた場合，スペンサーの初期の論文のなかでも，特に，「発達の仮説」（1852年），「人口の理論」（1852年），「マナーとファッション」（1854年）の三論文は，注目するべきものであり，スペン

サーは、これらの論文において、進化あるいは進歩について論じている。また、1857年の論文、「音楽の起原と機能」は、スペンサーの代表的な芸術論文として注目されるものである。スペンサーの社会学説においては、芸術は、科学・技術、言語、法律・道徳・慣習、等とならんで、人間の思考と行為の所産たる、超有機的所産とみなされるものであり、諸個人の結合された行為のプロセス、相互依存的な社会的ユニット（あるいは、アトム）たる個人の組織と解される、社会組織（すなわち、社会組織たる社会、ないしは、社会有機体）と、こうした超有機的所産のさまざまな相互依存関係は、スペンサーの社会学説における主要な研究課題の一つとなったのである。超有機的現象たる社会現象は、一方においては、社会の構造と機能と言う観点から、他方においては、累積的な超有機的所産と言う観点から考察されたのである。スペンサーの場合、こうした考察は、いずれも、超有機的進化と言う角度から試みられたのであり、究極的には、社会の発達・構造・機能に関する真理の探究こそ、社会学の基本的研究課題となったのである。

スペンサーは、超有機的現象の全体的考察を企てたが、その場合、個人の思考と行為の展開に照準を合わせ、社会有機体たる社会と超有機的所産の相互関係、個人および社会と自然環境の関係、社会と社会の諸関係を考察しつつ、超有機的現象に見られる共存の諸法則と継起の諸法則を解明することが、課題となった。彼自身の表現を借りるならば、社会学は、超有機的進化の研究と見られる科学にほかならない。コントの場合と同様に、スペンサーの社会学説は、いわば、社会静学と社会動学の二部門よりなるものと解されるが、全体的に見るならば、スペンサーの社会学説は、著しく社会動学に傾斜した学説であると言っても過言ではなからう。スペンサーの社会学説は、まさしく、社会進化論にほかならない。さらに、その社会学説は、社会有機体説にほかならない。かくして、スペンサーの社会学説は、社会進化論、社会有機体説の両面から検討され得る学説と言うこと

になる。

スペンサーの社会学説は、社会静学、社会動学の観点から検討されるものであるとともに、記述社会学および比較社会学の観点からも考察され得る学説である。われわれは、記述社会学と比較社会学について考察する場合、スペンサーの方法の問題について論ずることになるのであり、また、社会学と諸科学の関連性(特に社会学と歴史学、民族学、等の関連性)についても検討を加える次第となる。記述社会学および比較社会学と言う観点から考察され得るスペンサーの社会学説のうちでも、社会有機体説においては、組織のスタイルと方法が、社会進化論においては、変化のモードが、主要な論点となるのであり、こうした点を考慮するならば、われわれは、スペンサーの社会学説を、社会の変化のモードを考慮しつつ試みられた、社会の組織のスタイルと方法に関する考察とみなすことが出来る。社会の変化のモードは、社会の組織のスタイルと方法のうちに見出されるのであり、社会の組織のスタイルと方法は、社会の変化のモードを探究することなしには、十分に解明され得ないのである。スペンサーは、こうした変化のモードを進歩、ないしは、進化ととらえて、社会現象の探究を社会の構造および機能の変化と言う角度から試みたのである。こうした変化のモードは、単に進化と言う言葉のみをもって説明され得るものではなく、さらに、分解と言う側面からも検討するべきものであった。スペンサーは、力の持続と消散、同質的なものの不安定、均衡、等について論じつつ、同質的なものから異質的なもの^にいたる変化、単純なものから複雑なもの^にいたる変化、まとまりを欠いたものからまとまりを有するもの^にいたる変化を進化(いいかえれば、進歩)と規定し、こうした変化を分化と統合のプロセス、マスの増大と言う角度から考察した。スペンサーは、進化を次のように論じたのである(「第一原理」)。——「進化は、物質の統合と、それに附随した運動の消散である。その間に物質は、不確定でまとまりを欠いた同質性から、確定された、まとまりを有する異質性へと変化する。そ

して、その間に、維持された運動は、それと平行した変化をこうむる」⁽⁶⁾。こうした考え方こそ、スペンサーの思索の主導力となったものである。彼は、あらゆる諸現象において、かくのごとき変化のモードを認めたのであった。

スペンサーの社会学説は、その要点において、社会進化論であり、社会有機体説であるが、われわれは、こうした学説を、社会組織と社会制度に関する学説と規定することも出来る。社会組織の制度化のプロセスは、いわば、社会進化のプロセスにほかならない。社会の構造と機能は、制度において体系化されるのであり、彼は、各種の制度に注目し、そうした制度の発達について考察した。スペンサーの制度論は、「社会学原理」の主要部分を占めるものであり、スペンサーの社会学は、制度の社会学、社会組織の社会学とみなされるものと言えよう。こうしたスペンサーの社会学説において、特に中心的論点となるのは、分業の問題であり、彼は、政治経済学において論じられた経済的分業と、生理学あるいは生物学において指摘された生理的分業に着眼し、かゝる分業を基として社会的分業について説き、究極的には、社会的分業 (sociological division of labor) に着想するにいたり、かくして、スペンサーは、分業によって社会生活が営まれるものと考えたのである。スペンサーは、協同について次のように論じたことがある (「社会学原理」)。

社会生活 (SOCIAL life) は、ことごとく、協同 (cooperation) によって営まれている。そして、社会生活の特定のフォームを区別するための、協同という言葉の使用は、この言葉の狭義の用法である⁽⁷⁾。

スペンサーは、社会生活の特定のフォームを区別するために、社会の軍事的タイプと社会の産業的タイプとを区分し、前者を強制的協同、後者を任意的協同によって特徴づけたが、協同なる言葉は、かような仕方で使用

される場合もあった。かゝる社会のタイプは、当該社会において為されている対外的活動、対内的活動の程度の如何、社会のユニットである個人と社会の関係の如何によって決定されたのであるが、スペンサーの社会学説においては、こうした社会のタイプに関する考察とならんで、社会のコンポジションと統合に関する考察が、主要な論点となる。社会のコンポジションと統合を基準として諸々の人間社会を比較しつつ、社会進化について論じたスペンサーは、ホルドについて説き、社会の機能の分化統合によって、社会の構造の分化統合が生ずるものと考え、社会のサイズの拡大と、それに応じた社会の構造・機能の変化のパターンを探究したのである。かくして、社会のサイズ、生活の定住性、政治的統一とリーダーシップ、分業、等の状態の如何に従って、単純社会、複合社会、二重複合社会、三重複合社会が区分された。こうした諸社会こそ、社会のコンポジションと統合とを基準とした場合に諸々の社会的事実から導き出された人間社会の進化の諸段階に位置づけられた各事例にほかならない。スペンサーは、民族誌的文明史的諸事実を社会学のデータとして取り扱い、かゝるデータから、社会学の諸原理を導き出したのである。単なる歴史的諸事実の列挙、民族誌的諸事実の収集が、スペンサーにとって課題となったのではなく、そうした各種各様の諸事実の整理・分類を通じて、諸事実の共時的、継時的諸関係を究明することこそ、彼にとっては、重要な課題となった。このような課題の解決こそ、記述社会学において試みらるべき事柄であった。比較社会学は、記述社会学において為されたかような社会的諸事実の検討を基礎としてかたちづくられる。社会の自然史は、社会学の研究にとって有用なる、諸国民の生活史であり、諸国民の生活の諸相の一体的把握が、その目的となる。社会の構造および機能に関する、形態学的、生理学的観点からの考察は、社会の自然史における主たる要点であり、スペンサーは、社会の自然史を社会の発達・構造・機能のフレームにおいて位置づけたのである。かくして、ここに、記述社会学の領域が、かたちづくられた訳である。

社会生活は、協同によって営まれる、と言うスペンサーの見解は、分業（社会学的分業！）によって社会生活が成立すると言う考え方であるが、こうしたスペンサーの見解に対して、デュルケムは異議を唱え、分業は、社会生活を前提として、そうした社会生活のうちにおいてこそ認められるものであると論じた（「社会分業論」, 1893年）。ここに見られるデュルケムとスペンサーの対立点は社会学説史の研究において、最も基本的な論点の一つとなるものである。

ところで、スペンサーの社会学説を社会組織論および社会制度論として把握した場合、われわれは、社会組織論と社会制度論とを統一して、社会分業論と言う観点からスペンサーの社会学説を考察することが出来る。デュルケムは、分業の有する機能に注目し、社会の統一ないしは凝集を可能ならしめる分業の独自の機能に言及し、政治経済学において分業が問題視される以上に、分業は、決定的な重要性を有するものと主張した。スペンサーにおいても、分業は、社会の機能と言う点からも、重要なものとされたのである。スペンサーにおいては、分業は、基礎的には、諸個人における対等の諸関係と言った個人的次元において、そして、次に、社会全体の次元において論じられるのであったが、デュルケムは、当初から社会全体の次元において分業を問題としたのである。スペンサーの次のような見解は、さきの協同と社会生活に関する見解と同様に、彼の考え方を明瞭に示すものである。彼は、「倫理学のデータ」において、社会学的分業について、次のように述べている。

それゆえ、要するに、協同の普遍的基礎は、与えられた諸々のサービスに対して、受け取られた諸利益を調和させることである。もしも、こうした調和が見られなければ、なんらの生理学的分業 (physiological division of labor) もあり得ない。もしも、こうした調和が見られなければ、なんらの社会学的分業 (sociological division of labor) もあり得

ない。そして、生理学的なものであれ、あるいは、社会学的なものであれ、分業は、全体、および、各部分に利益をもたらすものであるので、特定の福祉、一般の福祉のいずれも、分業に必要な諸々のアレンジメントの維持に依存していると言う結果になる。社会においては、こうした諸々のアレンジメントは、顕在的な、ないしは、暗黙の取引が営まれている場合にのみ、維持されるのである⁽⁸⁾。

個人は、社会の利益のために存在するのではなく、社会は、個人の利益のために存在すると言うスペンサーの見解は、学説と言うよりは、彼の個人的主張と見られるものであるが、こうした主張は、スペンサーの社会学説の全体にわたって浸透しているように思われる。スペンサーは、「社会静学」においては、政治哲学ないしは社会哲学に関する基本的見解を明らかにし、諸個人の平等なる自由を主張し、こうした平等なる自由が保障されてこそ、社会（有機体）の発達が期待されると論じたのである。社会についての基本的見解は、社会は、つくられるものではなく、発達するものである、と言う考え方に要約される。スペンサーは、社会を自己統制的システム、ないしは、自律的システムとみなしたのである。かような自律的システムたる社会の存続と発達に際しては、諸個人が果すところの各種の社会的活動の緊密なネットワークの制度化が必要となる。自律的システムたる社会においては、生産活動に関連する維持のシステム、流通および運輸・コミュニケーションにかゝわる分配のシステム、それに、統制のシステムの主要な三種類のシステムが見出されるのであり、こうしたシステムに加えて、社会の各種の活動領域に応じたそれぞれの制度が、社会においては存在するのである。かような制度は、家政・家族、政治、教会・宗教、儀礼、産業、専門的職業等の各領域にわたって見られたが、こうした諸領域は、社会の自然史の各パートにほぼ対応するものであった。スペンサーは、諸制度の複合的ネットワークとして社会を考察し、社会組織を諸制度

のネットワーク，あるいは，分業の体系として把握したのである。諸個人は，普通，多様な制度のうちにおいて，一定の地位を占めており，その地位に対応した機能を果しているものとされた。社会の規模が小さく，分業が未発達で，構造なき社会と言えるような場合においても，少なくとも，男女の性差に基づいた分業が見られる，とスペンサーは考えている。男性，女性は，その社会における地位に即した機能を果しつつ，社会の自律的活動の一端を担うのである。現代の社会学の諸理論を考えるならば，われわれは，スペンサーが，地位および役割について独自の考察を試みていることに注目すべきであろう。社会の構造と機能は，社会の制度においてセットされており，諸個人の地位・役割は，また，社会の制度のうちに体系化されているのである。こうしたスペンサーの見解は，当然，今日においても注目を浴びるものでであろう。スペンサーの社会学説は，かくして，地位・役割の理論と言う角度からも検討される学説である。

スペンサーの社会学説において，今日，特に注目に価する論点の一つは，社会における構造と発達の関連性にほかならない。この論点は，秩序と進歩の関連性とほぼ一致するものであるが，スペンサーは発達のスピード，限界についても注目している。彼の視野には，社会の進化と分解とが，ともに入ってくると言ってもよからう。こうした点について考える時，次のようなスペンサーの言葉は，現代の社会学の研究者にとっても，きわめて重要な意義を有するものと考えられる。社会学の研究者であれば，誰しも，こうした問題の解決に取り組まねばならないと言っても過言ではあるまい。

社会においては，構造と発達の関係は，いかなるものであるのか？

いかなる時点にいたるまで，構造は，発達にとって必要であるのか？

いかなる時点を過ぎると，構造は，発達を遅らせるのか？ いかなる時

点において，構造は，発達を阻止するのか⁽⁹⁾？

スペンサー以後の社会学の研究者で、こうした問題を全く無視した研究者は、おそらく、少ないであろう。筆者の考えるところでは、スペンサーのこの言葉こそ、今日においても、社会学の研究者に対して、社会学の根本的な研究課題を端的に明確に示しているように思われる。

「総合哲学体系」のうちには、「第一原理」(1862年)、「生物学原理」(2巻, 1864年~7年)、「心理学原理」(2巻, 1870年~2年)、「社会学原理」(3巻, 1876年~96年)、それに、「倫理学原理」(2巻, 1879年~93年)が含まれている。スペンサーの哲学体系は、「第一原理」の出版に始まり、「社会学原理」の最終巻の刊行をもって終了したが、1873年にその第1巻が出版された「記述社会学」は、巻を重ねて、スペンサーの他界後も継続的に刊行されたのである。「社会学の研究」を著わしたスペンサーは、この著作において、社会学の主要な論点を明らかにし、数多くの問題点、疑点を示し社会学と他の諸科学の関連性を考察している。かくして、彼は、「社会学原理」の刊行の準備作業を終え、「記述社会学」を用意することによって、社会の科学的探究のルートを開拓したのである。

スペンサーは、「社会静学」の出版以前にも数種の論文を発表していたが、社会学の研究にとって特に注目に価する諸論文の発表は、すでに述べたように、「社会静学」の刊行後のことである。1840年代には、スペンサーの政治的態度は、ほど確固たるものとなっていたように考えられる。そうした態度は、自由放任主義と言えるものであり、かかる態度は、スペンサーの生涯にわたって、その思想の根底に認められたものである。「社会静学」の内容は、後年の社会学説の展開を考える場合、十分に考慮すべきであり、われわれは、スペンサーの社会学説の原点をこの著作のうちに認めることが出来る。社会を有機体として把握する立場、社会の発達に着眼するアプローチは、「社会静学」のうちに認められる。スペンサーは、1855年に、第二の著作である「心理学原理」を著わしたが、この著作は、

後の「総合哲学体系」のうちに含まれた「心理学原理」を準備した著作であった。政治哲学・社会哲学に関する考察と、心理学に関する考察は、社会学説のうちにおいても認められる。スペンサーにあっては、各領域の主たる論点は、それぞれの領域において相互に浸透するかたちで援用されている。けれども、社会学と生物学、社会学と心理学とは、それぞれ独自の科学であって、互いにその領域を侵すものではない。しかしながら、社会学においても、社会的ユニットたる人間の思考と行動は問題となるために、生物学や心理学における研究成果は、十分に活用されるのである。スペンサーは、「人間は、生物学の究極的な問題であると同時に、また、社会学の最初のファクターである」⁽¹⁰⁾と論じている。彼は、「心理学原理」(1855)年においては、「生活の最広義の、また、最も完全なる定義は、外的諸関係に対する内的諸関係の連続的適応——となるであろう」⁽¹¹⁾とも述べている。諸環境に対する生物個体の適応が問題となるように、諸環境に対する自律的システムである社会の関係も、社会学の研究においては、重要な論点となるのであった。

スペンサーは、「社会学原理」の最初において、「社会学のデータ」について論じ、「超有機的進化」について述べた後（第1章）、「社会諸現象の諸要因」について考察を試みた（第2章）。スペンサーによれば、未発達社会であるにせよ、社会が発達した場合であるにせよ、それぞれの社会には、その社会のユニットの諸々の性格と、そうした社会が存在するところの諸状態とに帰せられる諸現象が見られるのであり、スペンサーは、まず、自然環境に相当する外在的諸要因と、社会的ユニットたる、個々の人間に見られる身体的諸特性、情緒的諸特性、知的思想的諸特性に相当する内在的諸要因とを区別した。彼は、「また、常に、個々の人間の知性の程度と、個々の人間に特徴的な思考の諸傾向は、社会の静止 (social quiescence) ないしは、社会の変化 (social change) の協同的な諸原因となる」⁽¹²⁾と論じている。社会諸現象の外在的要因と内在的要因は、根源的な諸要因に

ほかならないが、こうした諸要因のほかにも、社会進化それ自体によってもたらされる、第二次的ないしは派生的な諸要因が指摘された。その第一は、社会の影響を受けた、無機物的有機的なる環境の進歩的な変化・修正であり、別の第二次的要因は、スペンサーによれば、一般的には、人口密度の増加が附随的に見られる、社会集合体 (the social aggregate) のサイズの増大にほかならない。この点に言及した彼は、次のように述べている。——「別な仕方で行き出された諸々の社会的変化とは異なった、単なる発達によって行き出された諸々の社会的変化が存在する。マスは、組織にとって条件であるとともに、また、組織の所産でもある。構造の異質性は、諸々のユニットの増加によってのみ可能であると言うことは、明らかである。分業は、諸々のユニット間において分業を行なうためには、そうしたユニットの数があまりにも少ないような場合には、それ以上には行なわれ得ない。統治の、および、産業の、複雑な諸々の協同は、多種類にわたる当事者、および、多くの序列に及ぶ当事者を供給するにたりるほど数多くの人口が存在しなければ、不可能である」⁽¹³⁾。

スペンサーは、こうした派生的諸要因の例として、次に、社会とその諸ユニットの相互的影響に注目した。さらに、きわめて重要な派生的要因として、彼は、超有機的環境の影響、すなわち一社会と近隣の諸社会の作用と反作用を指摘し、さらに、他の派生的一要因として、人為的なものとして区別される超有機的所産の蓄積に言及した。道具・機械・技術と言ったオーダー、言語のオーダー、知識・科学のオーダー、慣習・儀礼のオーダー、美的所産と言った、超有機的所産の各オーダーの間には、さまざまな作用と反作用が見られるのであり、こうした超有機的所産は、次第に極度に複雑なものとなって、その影響力も一層、強化されて行くのである。社会進化の間において、こうした多様な各オーダーは、常に、諸個人と社会に変化・修正を加えるものであるとともに、諸個人および社会によって、変化・修正が加えられる。スペンサーによれば、かような超有機的所産の

多様なオーダーは、社会それ自体の非活動的部分と考えられるようなもの、さもなければ、第二次的環境と考えられるようなものを徐々にかたちづくるのである。スペンサーは、社会諸現象の諸要因をこのように考え、こうした諸要因の多様な作用反作用、かかる諸要因の相乗的作用によって、社会進化が見られるものと論じたのである。「記述社会学」は、図表化の形式をとった著作であるが、この著作においても、以上のような社会諸現象の諸要因に関する記述が見られる。その意味からしても、われわれは、スペンサーのかような社会現象に関する主たる論点に注目すべきであろう。

スペンサーは、未開から文明にいたる、各種各様の社会を相互に比較しつつ、人間社会に見られる諸現象の共存と継起のパターン、そうした共存と継起を可能ならしめる諸契機、諸条件の探究を試みた。「社会学の研究」および「社会学原理」のうちにおいては、こうした点に関する見解が明確に認められるが、最初の著作である「社会静学」においても、すでに、次のような論述が見られることは、注目されることである。

そうした未開のコミュニティおよび進歩したコミュニティの諸々のユニットが対照的であるように、未開の諸コミュニティと進歩した諸コミュニティは、それらの構造の諸原理と言う点において、本質的に、異なっているにちがいない。他の諸々の有機体と同じ様に、社会有機体 (the social organism) は、その発達 (development) のコースにおいて、そうした諸形態においては、種々様々のその諸機能 (sundry of its functions) は、究極的な諸装置が効果的となるやいなや消えるように運命づけられた諸装置によって果されると言った、一時的な諸形態を通過しなければならない⁽¹⁴⁾。

「社会静学」のこの文章は、「社会学の研究」ないしは「社会学原理」のうちに見出されたとしても、なんら不思議とは言えない文章である。この

一節から察する限り、スペンサーは、「社会静学」の執筆の時点において、後年の社会学の基本的構想を得ていたようにも考えられる。「社会静学」を著わした時、彼は、個人と社会の関係を考慮しつつ、社会の発達・構造・機能についても、すでに十分に注意を払っていたことは間違いない。この著作は、疑いなく、社会学の研究者となったスペンサーの思索の原点を示すものである。

スペンサーは、「社会学の研究」において、社会の科学 (a Social Science)、すなわち、社会学の研究課題について次のように論じている。この一節は、スペンサーの問題意識と論点、アプローチを最も明瞭に示したものであると言ってよい。

ただ小さな、かつ、まとまりを欠いた諸々の社会集合体をかたちづくるだけの、そうした人々の諸タイプから始めて、かような科学 (社会の科学をさす。筆者注) は、どのような仕方で、個人の、知的な、また、情緒的な諸特徴が、それより進んだ集合を否定するかと示さなければならない。この科学は、生活の変化した諸状態の下において生じて来たところの、個人の性格のわずかな諸変化が、どのように多少ともより大なる集合体を可能ならしめるかと言うことを説明しなければならない。この科学は、あるサイズを有する諸々の集合体に見られる、そのメンバーたちがそうした社会的諸関係のうちにおちいるところの、統制的な、また、活動的な、社会的諸関係の発生 (the genesis of the social relations, regulative and operative) を跡づけなければならない。この科学は、諸ユニットの諸々の性格をなお一層、変えることによつて、結果として生じる社会構造のなお一層の複雑化をともなう、なお一層、進んだ集合を促進するような、より強力な、また、一層拡大された社会的諸影響を示さなければならない。最小の、かつ、最も未開な社会から、最大の、かつ、最も文明の進んだ社会にいたる、あらゆる秩序

とサイズを有する諸社会のうちにおいて、この社会の科学は、人間の共通の諸特徴によって決定された、いかなる諸特徴が共通に存在しているか、また、ある種の人々を特徴づけている諸特徴から生ずる、諸社会のうちのある諸グループを特徴づけているところの、それほど一般的でないいかなる諸特徴が存在しているか、そして、それぞれの社会に見られるいかなる諸特色が、そのメンバーたちの諸特色に跡づけられるものであるかと言うことを確かめなければならない。いずれの場合においても、社会の科学は、そうした諸個人の諸性格が、部分的にはあらゆる人々の諸性格と同様なものであり、部分的には、同類の人々の諸性格と同じものであり、部分的には、それ独自のものであるような、そうした諸個人の相互的な諸行為によってもたらされたような、社会的集合体の発達、発展、構造および諸機能をその主題とするのである⁽¹⁵⁾。

社会的集合体の発達（生長 growth）、発展（発達 development）、構造（structure）、諸機能（functions）こそ、社会学の主題とされたのである。このように論じたスペンサーは、さらに続けて、「社会進化のこうした諸現象は、もちろん、それぞれの社会がさらされているところの諸状態——その社会の位置によって、また、近隣の諸社会に対するその社会の諸関係によって提供された諸状態に当然言及することによって、説明されねばならない」⁽¹⁶⁾と述べている。こうした考え方は、すでに述べたように、「社会学原理」においても認められたのである。

スペンサーは、「社会学の研究」において、社会学の研究を行なう場合に見られる数々の難点、克服すべき問題点、障害点を挙げ、そうした難点や障害の除去に努めた。こうした難点ないしは障害は、彼によれば、社会学が取り扱う諸事実に内在する本質から、かような諸事実の観察者たる研究者自身の性格から、そして、観察さるべき諸事実に対して研究者が立っているところの特異な関係から生じて来るものであった。一般化される諸

現象は、直接的に認知できるようなものではなく、各種の器具・機械によって知られるものでもなく、他の科学に見られるように計測されたり、測定されるものではなかった。また、こうした現象は、心理学が扱う諸現象のように内省によって認知されるものでもなかった。「分業のような、社会学における枢要な諸事実ですら、なぜ、長い間、認められないままであったのかと言う理由は、かような次第によるのである」⁽¹⁷⁾とスペンサーは述べている。かかる難点の一つは、社会現象を研究する当事者が、社会の一員であると言うことから生ずるものであった。そのために、自らを、あらゆる自己の諸関係から切り離すこと、当事者自身の社会の、また、その時代の生活によって自らのうちに生じた、そうした諸々の関心、偏見、等をすべて除去すること、ナショナルリティ、主義信条、個人的福祉に言及することなしに、社会がうけたところの、また、うけつつあるところのあらゆる変化を見ると言うことは、常人には全く不可能なことであり、例外的な人のみが、そうしたことを完全に為し得るものであった。社会のメンバーたる個人の置かれた状況は、スペンサーの表現を借りるならば、次のようなものである。——「一般的に言うならば、市民の生活は、自らが占めているところにおいて、自らの機能（職能・役目 function）を当然、果すことによるのみ可能となる。そして、当事者は、このゆえに、自己自身とその社会の間において生じている枢要な結び付きによって生まれた諸々の信念と感情から自己自身を完全に解放し得ないのである」⁽¹⁸⁾ スペンサーは、社会学の研究者として、この新しい科学の当面する数々の問題に取り組まざるを得なかった。デュルケムは、スペンサーに見られる方法の欠如、その主観的形而上学的性格を厳しく批判し、スペンサーの社会学説の心理学への傾斜に疑問を呈したが、スペンサー自身は研究対象、研究主体の位置づけ、そうした対象と主体の関係については、考慮を払っており、社会学の方法についても、注目していた。スペンサーは、社会生活を対象化して考察することに強い関心を示している。そのために、彼は、異なる種類

の諸社会，異なる発達段階における諸社会の比較を試みたのである。記述社会学と比較社会学は，社会生活の対象化と言う点において考察されたものと考えられる。ただし，スペンサーの作業が，分析と言うよりは，分類にとどまるものであったとすれば，この点においても，問題は残ることになるろう。

社会諸現象は，空間・時間の諸次元において，きわめて多様なかたちで巾広く見られるものであり，こうした事情によっても，多くの困難が生まれて来るのである。スペンサーは，「さらに，社会学的諸事実のそれぞれは，単一の対象ないしは行為において観察出来るものではなく，そうした諸事実のそれぞれは，多くの諸対象および諸行為の記載と比較を通じてのみ到達されるものであって，社会学的諸事実の性格 (the nature of sociological facts) は，他の諸事実の認知よりも，社会学的諸事実の認知を一層，困難なものとしている」⁽¹⁹⁾ と論じてもいる。しかしながらスペンサーは，社会学の研究を放棄したわけではなく，むしろ，積極的に，自己の主要な論点を明らかにしつつ，独自のフレームをかたちづくって行ったのである。こうした点を考えるならば，「記述社会学」が，スペンサーの社会学の研究において，重要な位置を占めていることを，われわれは，あらためて認めなければなるまい。

スペンサーは，社会学の科学としての地位を確立させるために，次のように論じたのである（「社会学の研究」）。

われわれは，なんらかの秩序を有する，諸々のユニットよりなるそれぞれの集合体は，その諸ユニットの諸特性によって必然的に決定されたある諸特徴を有すると言うことを知った。それゆえに，そうした集合体の諸ユニットである人々の諸々の性格が与えられ，そして，かたちづくられた諸社会に見られるある諸性格が先決されているならば——他の諸性格は，周囲の諸状態の協同によって決定されるものであると言うこと

は、先験的に (*à priori*) 推論されたのである。社会学は、不可能なものであると言う現今の主張は、社会学の性格についての誤まった考え方を含んでいる。人間の生活によって供給された比喻を用いるならば、われわれは、伝記作者によって述べられる諸々の出来事は、生物の科学の範囲をこえるものであるけれども、まさしく、身体の発達および構造、それに機能が、生物の科学にとって主題となるように、それと同様に、歴史家たちが、彼等の諸頁をみたすところの諸事実は、大部分、社会の科学に対してなんらかの資料をもたらさないけれども、社会の発達 (*social growth*)、そして、社会の発達に附随するところの諸々の構造と諸々の機能の発生は、社会の科学 (*a Science of Society*) にとって主題となるということを知ったのである。この科学の範囲をこのように考えて、諸々の未発達の社会 (*rudimentary societies*) を相互に比較し、また、諸々の未発達の社会を、進歩の異なる諸段階における諸社会と比較して、われわれは、それらの社会は、まさしく、発達のある共通の諸特徴を示していると同様に、構造および機能のある共通の諸特徴を示しているということを知ったのである。さらにまた、同じ様に為された諸々の比較によって、この同じ科学の諸部分をかたちづくるところの、社会の発達と組織の間の関係と言った問題のような、大きな諸問題、いわば——政治家たちや歴史の著述家たちの精神を占めているような問題と比較して、卓絶した重要性を有する諸問題が、明らかとなった⁽²⁰⁾。

このようなスペンサーの見解は、社会学の重要な研究課題を示したものであるとともに、異なる社会の比較と言う方法の有する意義を主張したものと見えよう。社会の発達と組織、言いかえれば、社会の発達と構造の関連性は、スペンサーにとっても、きわめて重要な問題であったように思われる。スペンサーは、「自伝の人類学に対する関係は、歴史の社会学に対する関係に等しい」⁽²¹⁾と述べたことがあるが、人間個人の場合においても、

一国民の場合においても、伝記作者や歴史家たちが語る場所の歴史的叙述は、注目すべきものであり、人間の場合であれば、構造的、機能的な、人間の身体的・精神的進化を知るために、また、国民の場合であれば、それらの構造および機能の発達、諸制度の記述のために、こうした歴史的叙述は、必要なものとされたのである。ただし、スペンサーは、いわゆる歴史家たちの仕事に対しては、決して満足していなかったようである。スペンサーは、国民生活の全領域を包括的に取り扱うような社会の自然史の意義を説き、諸事実の収集・分類・整理・統合を試みる記述社会学の必要を痛感していた。社会学の研究に対して、資料を提供し得るような歴史があれば、彼はそうした歴史をおそらく軽視しなかったはずである。けれども、スペンサーは、そのような歴史の不在に疑問を抱き、自ら協力者の助けを借りて、「記述社会学」の刊行にふみ切ったのである。

スペンサーは、「社会学原理」の一節においても、次のように論じている。

異なる種類の諸社会、および、異なる諸段階における諸社会を比較することによって、われわれは、サイズ、構造、機能、等のいかなる諸特徴が結び付きを有しているかと言うことを確かめなければならない⁽²²⁾。

「社会静学」を著わした時から、スペンサーは、この一節に見られるような考え方を抱いていたように思われる。1850年代の後半において、論文「進歩、その法則と原因」を発表し(1857年)、さらに論文「社会有機体」を著わしたスペンサーは、この両論文の執筆によって、社会学説の枠組と主たる論点を確定することが出来たのである。スペンサーは、「社会有機体」(1860年)の発表に先立って、「ウェストミンスター評論」に「いかなる知識が最も有益であるか？」と題した論文を発表し、この論文において、社会の自然史(the natural history of society)こそ、人々にとって必要

な知識であることを強調した。国民ないしは国家の発達の仕方、組織のされ方を知る助けとなるようなあらゆる諸事実が、求められたのであり、政治、教会行政、産業のシステム、知的状況、美的教養、衣・食・娯楽と言った人々の日常生活のスケッチ、あらゆるクラスの理論的、実践的な諸道徳、等々の各領域にわたる諸事実の密接な相互関係、すなわち、コンセンサスの如何と、こうした諸事実の継起のパターンの如何とが明らかにされねばならない、とスペンサーは説いたのである。これらの諸事實は、一つのアンサンブルのうちにおいて、全体の相互依存的諸部分として、考察されるべきものであった。要するに、諸事実のコンセンサスと、諸事実の変化のプロセスが問題となったのである。かくして、スペンサーは、次のように論じた。

実際の価値を有する唯一の歴史は、記述社会学 (Descriptive Sociology) と呼ばれるものである。そして、歴史家が果し得る最高の職務は、比較社会学 (Comparative Sociology) に対して、また、社会諸現象が従うところの究極的な諸法則に関する、それに続いておこる確定に対して、諸資料を供給するように、諸国民の諸生活を述べるという職務である⁽²³⁾。

スペンサーは、この論文において、さらに、かりに、社会学の最も基本的な諸真理は、一定の諸状態において、どのように、人々は一般に考え、感じ、そして行為するかと言うことに関するある知識が得られるまでは、明らかにならないものとするれば、身体的、精神的なあらゆる能力にわたる、人間に関する十分な知識が得られない限り、社会学についての広範囲の理解は、あり得ない、とも説き、続いて次のように論じたのである。この時点において、スペンサーの社会学の拠点は、明白となったと言ってよからう。——「社会は、諸個人よりなる。社会において為されたすべては、諸

個人の結ばれた諸行為によって為されたものである。そして、それゆえに、社会諸現象の解決と言うものは、個人の諸行為のうちにおいてのみ見出され得る。しかし、諸個人の諸々の行為は、彼等の本性の法則に依存している。そして、彼等の諸行為は、こうした法則が理解されるまでは、理解され得ない。しかしながら、こうした法則は、その最も単純な表現に還元された時には、一般的には、身体および精神の法則からの必然の結果であることが証明される。それゆえ、生物学と心理学は、社会学を説明するものとして、不可欠なものであると言うことになる」⁽²⁴⁾ スペンサーの社会学説は、これまでの考察からも明らかなように、生物学、心理学、歴史学と密接な関連性を有するものである。社会を有機体として考察し、社会の発達・構造・機能について論ずる立場は、生物学から学ばれたものである。かくして、社会の形態学的生理学的考察が試みられたのであった。スペンサーは、適応に関する着想を心理学からも学んでいる。社会的ユニットたる個人の思考と行動について考える場合、心理学と生物学の研究成果は、有力な武器となったようである。歴史学は、それが社会の自然史の名に価する限り、社会学にとって、不可欠なものとしたのである。また、政治経済学においても、分業が一つの論点となっており、社会の発達に関する考察も、この領域においてすでに試みられていた。スペンサーは、こうした政治経済学の業績に多くを学んでいる。政治経済学の研究者が、社会における分業の意義に注目したとするならば、スペンサーは、分業を通じて、社会の発達および構造の諸相を探究したのである。彼にとっては、分業は、まさしく社会学的分業にほかならぬものであり、社会現象は、スペンサーにおいては、いわば、社会学的現象とみなされたのである。

われわれは、「記述社会学」に見られるスペンサーの序文の一節を見て、この稿を閉じることにしたい。

さらに説明を進めて、私は、「記述社会学」と言うタイトルの下にお

いて、このように集められるところの、諸資料の分類された編集と要約は、社会の科学 (Social Science) の研究者に対して、諸動物の異なる諸タイプの諸々の構造および機能に関する説明が、生物学者の結論に対して役立つところのそうした関係と同じような関係において、社会の科学の研究者の結論に対して役立つものであるデータを提供するように意図されたものであると言ってよかろう。有機体の諸部分の結び付き、諸形態、そして、諸活動、それに、起原のモードを比較することが可能とされたような、諸有機体の異なる諸種類に関する、そうした体系的な記述が見られるまでは、生物の科学は、なんらの進歩を成し遂げることは出さなかった。そして、同じような仕方、諸々の一般化を科学的と呼ばれるにふさわしいものとさせる確実性を有するところの一般化と言うものが、社会学において達せられるまえに、いかなる社会諸現象が、いつも、結び附いているかと言うことを容易に確かめることが出来るような諸手段を提供するように配列された、さまざまなタイプの諸社会、および、進化のさまざまな段階における諸社会の諸制度と諸活動に関する明確な説明が存在しなければならぬ⁽²⁵⁾。

スペンサーは、1898年に「社会進化とは何か？」と題する論文を発表した⁽²⁶⁾。この論文において、彼は、再び、自己の基本的見解を表明したが、この論文の一節で、スペンサーは、1857年の論文「進歩、その法則と原因」の一部を紹介している。スペンサーの思索は、徐々に、あたかも一つの進化とも言えるような発展を示しているが、その思索の核心に相当するものは、半世紀にわたって持続的に維持されたのである。スペンサーは、この論文、「社会進化とは何か？」を著わして後、数年して、1903年に世を去った。それから70年の歳月を経た今日、われわれは、スペンサーにならって、「社会進化とは何か？」と言う問に対して、一つの解答を用意する必要がある。この社会進化という言葉が社会の構造と発達の関係と言う言

葉に置きかえてみよう。その時、われわれの前に示される間こそ、今日の社会学の研究においても、最も注目に価する問題にほかならない。「社会静学」を著わし、「社会学の研究」、「記述社会学」を世に送り、さらに、「社会学原理」を執筆したスペンサーは、こうした問題の所在を示したのみならず、この問題解決に挑戦した社会学の一研究者であった。

今日、われわれは、スペンサーが孤独に歩んだ道を、これまでの多数の先人の残した道標を手掛りとして進んでいる。そうした道標の幾つかは、間違いなく、ハーバート・スペンサーによって残されたものである。われわれは、1873年から今日にいたる社会学の研究の百年の道程を振り返りつつ、これから歩むべき道を探究しなければならない。(1973年11月20日)

注

- (1) Oeuvres complètes de J.J. Rousseau, tome XI., nouvelle édition, mélanges, Paris: Chez Dalibon, Libraire, M DCCC XXVI, p. 245. Essai sur l'origine des langues, chapitre VIII. ルソー, 言語起原論, 小林善彦訳, 現代思潮社, 1970年第1版, 1971年第2刷, 63頁~4頁, 第8章. ここでは, 小林氏訳による.
- (2) Auguste Comte, Cours de philosophie positive, tome quatrième, contenant La partie dogmatique de la philosophie social, Paris: Bachelier, imprimeur-libraire, 1839, p. 252.

コントは、「実証哲学講義」第4巻の脚注において、次のように述べている。

(1) Je crois devoir hasarder, dès à présent, ce terme nouveau, exactement équivalent à mon expression, déjà introduite, de *physique sociale*, afin de pouvoir désigner par un nom unique cette partie complémentaire de la philosophie naturelle qui se rapporte à l'étude positive de l'ensemble des lois fondamentales propres aux phénomènes sociaux.(ibid., p. 252.)

- (3) ベルグソン, 創造的進化, 真方敬道訳, 岩波文庫, 下, 昭和36年, 217頁~9頁, 第4章 機械論と概念論.
- (4) 拙稿, 世紀末の社会学, 哲学 第60集, 1972年12月を参照せよ.

- (5) Herbert Spencer, *An Autobiography*, vol. I, London: Williams and Norgate, 1904, pp. 175-6, Chapter XII. A Nomadic Period. 1840-41.
- (6) Herbert Spencer, *First Principles*, vol. II, Third Impression. Popular Edition, London: Williams & Norgate, 1910, p. 321, Chapter XVII The Law of Evolution concluded.
- (7) Herbert Spencer, *The Principles of Sociology*, vol. II-3, New York: D. Appleton and Company, 1897, p. 553, Part VIII.—Industrial Institutions XXI. Cooperation.
- (8) Herbert Spencer, *The Data of Ethics*, Chicago-New York: Rand, McNally & Company, Author's Preface 1879, p. 168, Chapter VIII. The Sociological View.
- (9) Herbert Spencer, *The Study of Sociology*, Eighth Edition, London: C. Kegan Paul & Co., 1880, p. 63, Chapter III. Nature of the Social Science.

社会学を諸々の社会システムの研究 (the study of social systems) と規定したマーシャル (T.H. Marshall) は、こうした諸々のシステムを、高度に、予言可能で、反復的で、協同的であるような、相互に関連した諸活動のセットと説きつつも、社会においては、体系的でないものが数多く存在すると述べ、正しく予測出来ないような重要な諸活動が存在すると言う。マーシャルによれば、システムそれ自体のうちに合体されていない、葛藤の諸形態が存在するばかりか、さらに、システムに挑戦し、そして、システムを破壊さえするような他の諸形態も見られるのであり、諸々のシステムは、ほとんど絶えず変化しつつある、と言えるのである。このように述べたマーシャルは、社会学の課題について、次のように論じたのである。——「社会学の課題は、こうした諸要素の相互作用を探究することであり、また、それらの諸関係に対する糸口を見出すことである。そして、社会学は、諸社会制度と個人の行動のいずれをも研究することによって、この課題に着手する」(T. H. Marshall, *Sociology at the Crossroads and other essays*, London: Heinemann, 1963, p. 31, Chapter II. Sociology—the Road Ahead.) マーシャルによれば、コントの主たる目的は、諸段階と言う言葉で、発達ないしは発展を述べることであり、マックス・ウェーバーは、理念型を用いて、構造とそのあらわれ方を強調し、ジンメルにおいては、葛藤の諸相が問われ、デュルケムにとっては、コンセンサスの現象が特に問題となり、正常なるも

の認容出来る定義を見出すことが、関心事となったのであって、アノミー現象が指摘されたのである。代表的な社会学の研究者の主要な論点をこのように要約したマーシャルは、最後にわれわれが、ここで見たところの、スペンサーの文章を挙げている。社会システムの研究において問題となる主要な要素である、コンセンサス、正常なるもの、アノミー、そして、協同と葛藤、それに、構造と発達と言った要点は、こうした研究者の研究のうちに見出されるのである (T.H. Marshall, *ibid.*, p. 32.). 以上のような論点を考える時、われわれは、社会人類学者として知られるファース (Raymond Firth) の社会構造と組織に関する見解に注目すべきであろう。マーシャルも、ファースのこうした論点に注目している。

ファースは、次のように述べている。——「社会的連続性と同様に社会的適応を研究することが必要である。構造的分析は、そのみでは、社会変動を説明し得ない。社会分類学 (a social taxonomy) は、生物学のある諸部門における諸種の分類と同じように無味乾燥になりやすい。社会的行為の組織的側面に関する分析は、構造的側面の分析にとって必要な補足である」 (Raymond Firth, *Elements of Social Organization*, London: Watts & Co., First published 1951 Third Edition 1961 Reprinted 1963, p. 35, Chapter I The Meaning of Social Anthropology.) 社会的行為の組織的側面の分析によって、一層動的な取り扱いが可能となるのである。

- (10) Herbert Spencer, *The Study of Sociology*, p. 336, Chapter XIV. Preparation in Biology.
- (11) Herbert Spencer, *The Principles of Psychology*, London: Longman, Brown, Green, and Longmans, 1855, p. 374, Chapter IV. The Correspondence between Life and Its Circumstances.
- (12) Herbert Spencer, *The Principles of Sociology*, vol. I-1, New York: D. Appleton and Company, 1897, p. 9. Part I.—The Data of Sociology, Chapter II. The Factors of Social Phenomena.
- (13) *ibid.*, p. 11, Part I, Chapter II.
- (14) Herbert Spencer, *Social Statics; or, The Conditions essential to Human Happiness specified, and The First of Them Developed*, New York: D. Appleton and Company, 1882, p. 458, Chapter XXX. General Considerations.
- (15) Herbert Spencer, *The Study of Sociology*, pp. 52-3, Chapter III. Nature of the Social Science.

- (16) *ibid.*, p.53, Chapter III.
- (17) *ibid.*, p. 72, Chapter IV. Difficulties of the Social Science.
- (18) *ibid.*, p. 74, IV.
- (19) *ibid.*, p. 387, Chapter XVI. Conclusion.
- (20) *ibid.*, p. 386, Chapter XVI.
- (21) *ibid.*, p. 58, Chapter III. Nature of the Social Science.
- (22) Herbert Spencer, *The Principles of Sociology*, vol. I-1, p. 442, Part I.—The Data of Sociology, Chapter XXVII. The Scope of Sociology.
- (23) Herbert Spencer, *Essays on Education and kindred subjects*, Introduction by Charles W. Eliot, London: Dent New York: Dutton; Everyman's Library, First included in Everyman's Library! 1911 Last reprinted 1966, p. 29, What Knowledge is of most worth? in the *Westminster Review* for July 1859.
- (24) *ibid.*, pp. 29-30, What Knowledge is of most worth?.
- (25) *Spencer's Descriptive Sociology: A Cyclopaedia of Social Facts; Representing the Constitution of Every Type and Grade of Human Society, Past and Present, Stationary and Progressive: Classified and Tabulated for Easy Comparison and Convenient Study of the Relations of Social Phenomena., Projected and Arranged by Herbert Spencer, No. I., English, Compiled and Abstracted by James Collier, New York: D. Appleton and Company, 1873.—Descriptive Sociology; or Groups of Sociological Facts Classified and Arranged by Herbert Spencer, Compiled and Abstracted by David Duncan, Richard Schepig and James Collier, English, Compiled and Abstracted by James Collier, New York: D. Appleton and Company.—p. viii, Provisional Preface, by Herbert Spencer.*
- (26) Herbert Spencer, *Various Fragments*, London: Williams and Norgate, 1900, pp. 181-196, What is Social Evolution?

附 記

スペンサーの社会学説の研究を試みる場合には、まことに多くの問題が見られ、多様な角度および観点からの考察が求められる。この小論においては、スペンサーの社会学説の論点と彼の観点を考察し、スペンサーの社会学説のフレームワークを

究明することが主題となっている。筆者は、すでに、学位論文、「ハーバート・スペンサーの社会学説に関する基礎的研究」(1973年)において、スペンサーの社会学説の形成過程と、その社会学説の要点に関する考察を試みたが、この小論は、この学位論文の各章とは別に、このたび、あらためて執筆されたものである。

参考までに、次に、「ハーバート・スペンサーの社会学説に関する基礎的研究」の各章の構成を示しておきたい。

*

「ハーバート・スペンサーの社会学説に関する基礎的研究」

序 論

第1章 人間の研究と社会の研究

本研究の意図と論点について

第2章 19世紀末の社会学

第3章 初期社会学説の論点とそれに対する批判 コントを中心として

第4章 社会学の成立と展開

特にマルクスの思想およびテンニエスの学説を中心として

〔以上、第1巻、所収〕

本 論

第5章 「社会静学」を中心とするスペンサーの初期の思想

第6章 スペンサーの学説の意義と学説批判

第7章 スペンサーの初期論文と進化論思想の展開

第8章 論文「進歩 その法則と原因」について

第9章 社会の科学の成立

〔以上、第2巻、所収〕

第10章 スペンサーとタイラーに見られる進化論思想とそれに対する批判

第11章 社会学の領域と観点
スペンサーの学説の主たる論点について

[以上, 第3巻, 所収]

第12章 社会のコンポジションとタイプ

第13章 スペンサーの芸術論
論文「音楽の起原と機能について」を中心として

第14章 社会有機体と社会進化

[以上, 第4巻, 所収]

第15章 スペンサーの記述社会学

第16章 社会学説の構成と主たる論点 協同の理論を中心として

第17章 進化論的芸術論

補論 1 レオナルド・ダ・ヴィンチの思想と活動

補論 2 レオナルドの絵画科学

補論 3 ルソーにおける人間と社会

[以上, 第5巻, 所収]

結 論

第18章 スペンサーの社会学説

第19章 社会現象の探究
超有機的所産を中心として

第20章 スペンサーの進化論

第21章 社会の構造と発達

後 記

〔以上, 第6巻, 所収〕

〔別 巻〕

序 説

論文の構成と各章の要約

図表

文献

——以上, 全7巻——

*

この小論は, 昭和48年度, 慶應義塾学事振興資金による研究の一部である.

Herbert Spencer's World

The Scope of Sociology

Takeshi Yamagishi

What is the subject-matter of Sociology? What is the relation between Sociology and other sciences? How is it possible to study social phenomena scientifically? What is a society? Are there any social types and constitutions? These questions are questions of transcendent importance for Herbert Spencer (1820-1903). He was a philosopher, but he was also a founder of Sociology as a new science. Viewing social phenomena as *super-organic* phenomena, Spencer discussed the natural history of society and then asserted the necessity of Descriptive Sociology and Comparative Sociology. Using Spencer's phrase, the only History that is of practical value is what may be called Descriptive Sociology and the highest office which the historian can discharge, is that of so narrating the lives of nations, as to furnish materials for a Comparative Sociology and for the subsequent determination of the ultimate laws to which social phenomena conform.

What is a Social Science? Briefly speaking a Social Science, that is Sociology, is a science of social evolution which try to recognize truths of social development, structure, and function, that are some of them universal, some of them general, some of them special. This science has for its subject-matter the growth, development, structure, and functions of the social aggregate, as brought about by the mutual actions of individuals, but he as well referred to the accumulation of super-organic products. It was necessary to collect, classify and arrange various social facts according to sociological framework planned by Spencer. These social facts based on his sociological framework were really *sociological facts*. The core

conception of sociological theory of Spencer is that of social division of labor. This social division of labor is nothing but *sociological* division of labor. Spencer noted economical division of labor and physiological division of labor in Biology. The former was one of the main problems in the field of Political Economy, of which one of other problems is the notion of static and dynamic approach of social phenomena. It is notable that sociological theory of Spencer has its origin in Political Economy and Moral Philosophy in Britain and that each of his sociological approach or sociological point of view is intimately connected with his theories of Psychology, Biology, and Ethics. According to Spencer the human being is at once the terminal problem of Biology and the initial factor of Sociology. Herbert Spencer's Sociology is framed by, or based on these various sciences, however his Sociology has its original subject-matter and its specific scope.

Today many sociologists use technical terms coined by Spencer himself and some of these terms are as follows: *structure, function development, status, organization, institution, and social phenomena*, etc. Surely his sociological theory may be called proto-Sociology, but it is also evident that there are many fundamental problems and methods of Sociology in his works from *Social Statics* (1850) to *Principles of Sociology* (3 vols., 1876-96). Also his sociological point of view may be traced in *The Study of Sociology* (1873) and the first volume of *Descriptive Sociology* (1873). One of crucial problems proposed by Spencer is as follows and this question still now remains problem of great importance; What is the relation in a society between structure and growth? Up to what point is structure necessary to growth? after what point does it retard growth? at what point does it arrest growth? (*The Study of Sociology*, 1873, p. 63)